

## 子宮がん検診(車検診)

### 動 向

検診車による子宮がん検診は、昭和43年度から神奈川県、昭和47年度から横浜市より委託が加入された。また、老人保健法試行に伴い、昭和58年度から実施主体が神奈川県より市町村に移行し、今日に至っている。

検診内容は、診察・子宮頸部からの細胞採取であり、横浜市立大学、日本医科大学、北里大学、東海大学、聖マリアンナ医科大学の各医学部産婦人科医師が担当し、当協会では細胞診断と検査成績の作成・通知・追跡管理等を行っている。

検診の内容、ならびに精度管理については、「子宮がん車集団検診実施検討会」(構成メンバーは上記各大学及び県立がんセンター、事務局は当協会)において検討されている。

### 結 果

2002年度の車検診受診者数は33,072名(初診30%)、50歳未満の若年層38%、50歳以上の高齢層62%の割合、年齢階級別では、60歳代が最も多く、50歳代、30歳代の順である。要精検率0.43%、要再検率0.43%、両者合わせた要再精検率は0.86%である。発見されたがんは31例、頸がん28例(扁平上皮がん26例、腺がん2例)と体がん2例、卵巣がん1例からなる。がん発見率は0.09%、初診に高く(0.2%)、若年層に高く(0.16%)、殊に29歳以下が最も高く(0.26%)、30歳代に高い(0.22%)。

早期がん(0期、a期)が、扁平上皮がん26例中、18例(70%)と比較的高率に検出されたことは、車検診の絶大なる効果である。

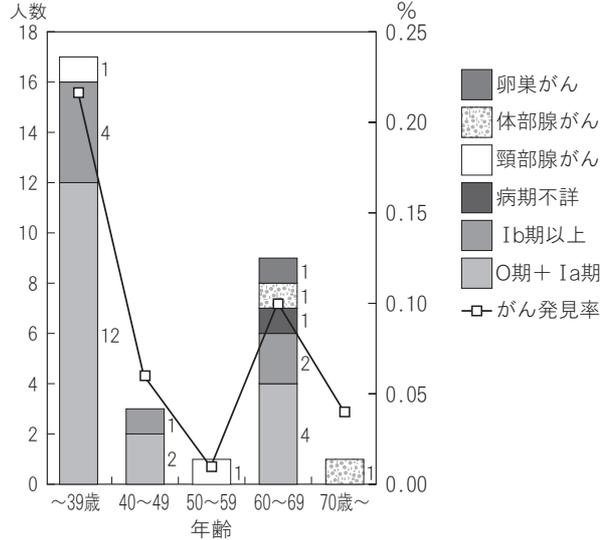
発見された異形成は77例(軽度36例、中等度28例、高度13例)である。異形成発見率は0.23%、初診に高く(0.45%)、若年層に高く(0.48%)、殊に29歳以下が最も高く(1.61%)、30歳代に高い(0.49%)。

以上のがん異形成を誘導した頸部細胞診断状況は、クラス再検13.9%、a63.8%、b91.7%、100%、100%である。クラス再検は、要精検、精検不要の区別が出来なかった判定保留群であり、本来のクラス分類ではないので、感度、特異度などの精度管理総合評価には利用できないが、頸がん2例、体がん1例、異形成13例を、偽陰性症例にせず検出されたことに大きな価値がある。

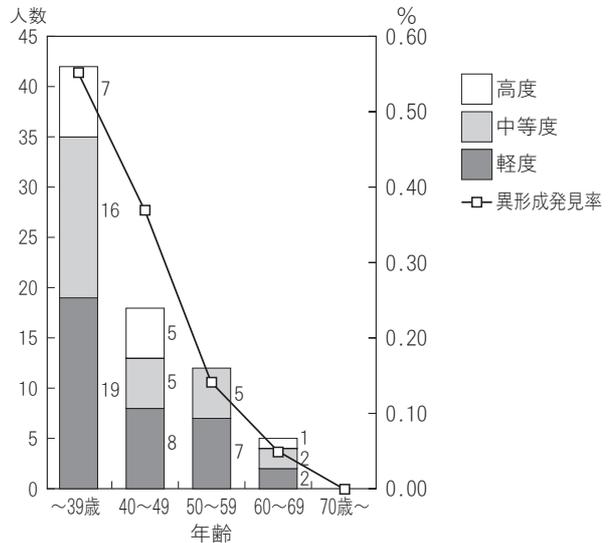
本年度の精度管理総合評価(病変有無追跡確定率89%)

は、感度100%、特異度99.9%、正診率99.9%、陽性的中率73%、陰性的中率100%、と極めて良好である。

図A 年齢階級別がん確定病期別実数及び発見率



図B 年齢階級別異形成実数及び発見率



### ま と め

子宮がん(車検診)のがん発見率は、初診、若年層に高率である。県民の健康を守ることを目的に、我々は、「いかにして、両者の受診者数を増加させるか」という課題に挑戦しなければならない。

関係の集計表は92~94頁に掲載